

いろ扱ひ

泉鏡花

青空文庫

これは作者の閱歴談と云ふやうなことに聞えますと、甚だ恐縮はなはほんの子供の内に読んだ本についてお話をするのでございますよ。
 此頃このごろは皆さんに読んで戴いて誠に御迷惑をかけますが、私は何うして、皆さんのお書きなすつた物を拝見して、迷惑処か、こんな結構なものはないと思ふんです。其それですが、江戸時代の文学だの、明治の文学だのと云ふ六ヶ敷むつかしいことになる、言ひ悪にくうございまずから、唯ねたゞ、小説、草双紙くさぎょうし、京伝本きやうでんほん、洒落本しやれほんと云ふ其積そのつもりで申しませう。母が貴下あなた、東京から持つて参りましたんで、雛の箱でささせたといふ本箱の中に『白縫物語』だの『大和文庫』まとぶんこ『時代かゞみ』大部なものは其位ですが、十冊五冊八

冊といろ／＼な草双紙の小口が揃つてあるのです。母はそれを大切に、綺麗きれいに持つて居るのを、透すきを見ちやあ引張り出して――但し読むのではない。三歳四歳では唯だ表紙たの美しい絵を土用干のやうに列ならべて、此武士このは立派だの、此娘は可愛いなんて……お待ちなさい、少し可笑をかしくなるけれど、悪く取りつこなし。さあ段々絵を見ると其理解わけが聴きたくなつて、母が裁縫しごとなんかして居ると、其処そこへ行つては聞きました、面倒くさがつてナカ／＼教へない。夫れそを無理につかまへて、ねだつては話してもらひましたが、嘸さぞ煩うるさかつたらうと思つて、今考へると気の毒です。なるほど脚色すぢだけは口でいつても言はれますが、読んだおもしろ味は話されません。又知識のないものに、脚色すぢだけ話をするとなる

と、こんな煩さい事はないのですから、自分もまた其様な物を読
 むと云ふ智慧はない時分で、始終絵ばかりを見て居たものですか
 ら、薄葉うすえふを買つて貰つて、口絵だの、挿絵だのを写し始めたん
 です。それから鎧武者よろひむしやが大変好すきになりました。それに親父おやぢが金
 属ほりしの彫刻師だものですから、盃さかづき、香炉も、最う目貫縁頭めぬきふちがしらなどは
 ありませんが、其仕事をさせる積りだつたので、絵を習へと云ふ
 ので少しばかりネ、薄蘭すゝきらん、竹などの手本を描いて貰ひましたが、
 何、座敷を取散かしたのが、落で。其中に何なんです。近所の女
 だの、年上の従姉妹いとこだのに、母が絵解いっをするのを何時か聞きかじ
 つて、草双紙の中にある人物の来歴が分つたものだから、鳥山秋
 作照忠おほとも、大伴おほともの若菜姫わかしほなんといふのが殊ひいきの外ひいき最負ひいきなんです。処

が秋作、豊後之助の鼻眞なのは分つて居るが、若菜姫が宜くツて
ならない、甚だ怪しからん、是は悪党の方だから、と思つて居た
んです。のみならず、一体どう云ふものだか、小説の中にある主
人公などは、善人の方よりは悪党がてきはきして居て可い、善人
とさへ謂や、愚図々々しやあがつて、何うかしたらよささうなも
んだ。泣いたり、口説いたり、何のこツたらう。浄瑠璃のさは
りとなると頭痛がします。併し、敵役の中でも石川五右衛門
は甚だ嫌ひですな。熊坂長範の方が好い。此頃また白縫の後の方
を見ると、口絵に若菜姫を描いて、其上へ持つて来て、（皆様御
鼻眞の若菜姫）と書いてある。して見ると一般の読者にも、彼の
姐さんは人氣があつたものと見えますね。

母はからだが弱くつて……大層若くつて亡なくになりましたが……亡
なつた時分に、私は十歳とをだつたと思ひます。其の前から小学校へ
行くやうになつて、本当の字を少し許ばかり覚えたりなにかした。そ
れから暫しばらくさう云ふものに遠とざかつて居た、石盤をはふり出して、
いきなり針箱の上へ耶須多羅女やすたらによの泣いて居る処を出されて御覽な
さい。悉達しつた太子を慕つて居るのと絵解をするものは話さねばなら
ないでせう。さて其の（慕ふ）といふことを子供に説明をして、
聞かせるものは、こりやよほど面倒だから、母もなりたけ読ませ
ないやうにしましたんです。それに親父が八釜やかまし敷い、論語とか孟子と
か云ふものでなくつては読ませなかつた。処が少しイロハが読め
るやうになつて来ると、家にある本が読みたくなつたでせう。読

んでると目付めつかつて恐ろしく叱しかられたんです。そこで考へて、机の上に斯かう掛つて居る、机掛ね、之これを膝の上へ被かぶさるやうに、手前を長く、向うを一杯にして置くので、二階に閉籠あしおつて人の蹠と音がするとヒョイと其の下へ隠すといふ、うまいものでせう。

時々見付かつて、本より、私の方が押入へしまはれました。恚かういふのはいくらもある。一葉女史なんざ草双紙を読んだ時、此人このは僕と違つて土蔵があつたさうで、土蔵の二階に本があるので、故わざと悪戯いたづらをして、劍突けんつくを食つて、叱しかられては土蔵へ抛はぶり込まれるのです。窓に金網が張つてあるのでせう。其網の目をもるあかりで細かい仮名を読んだ。其の所せ為みで、恐ろしい近視眼ちかめ、これは立たて女形をの美を傷つけて済みません。話が色々になります、僕

が活版本を始めて見たのは結城合戦ゆふきがつせんはなくはがた花鋏形はなばしりかたといふのと、難波なには戦記せんき、左様です、大阪の戦のことを書いたのです。厚い表紙で赤い絵具をつけた活版本なんです。友達が持つて居たので、其時初めて活版になった本を見ました。殊にあゝ云ふ百里余も隔つた田舎なかですから、それまでは未だ活版と云ふものを知らなかつたので、さあ読んで見ると又面白くつて仕様がない。無論前に柔い、「でござんすわいなー」と書いてある草双紙を見た挙句に、親父がね、其癖大好なんで、但し硬派の方なんだから、私に内々で借りて来たあつた呉越軍談、あの、伍子胥ごしよの伝の所が十冊ばかり。其の第一冊目でせう。秦しんの哀公が会を設けて、覇を図る処があつて、斉せい国の夜明珠やめいしゆ、魯国ろの雌雄劍、晋国しんの水晶簾すゐしやうれんなどとならぶ中

に、子胥先生、我^{わが}楚国^{もつ}以て宝とするなし、唯善を以て宝とすと夕
ンカを切つて、大気焰を吐く所がある。それから呉越軍談が鼻屑
になる。従つて堅いものが好きになつて来た。それで水滸^{すゐこでん}伝、
三国志、関羽の青龍刀、張飛の蛇矛などが嬉しくつて堪らない。
勿^{もちろん}論其時分、雑誌は知らず新聞には小説があるものか無いもの
か分らぬ位。処が其中に何んですネ。英語を教はらうと、宣教師
のやつて居る学校へ入つたのです。さうするとその学校では郵便
報知新聞を取つて居た。それに思軒^{こししや}さんの警使者^{こししや}が毎日々々出て
居ます。是はまた飛放れて面白いので、こゝで、新聞の小説を讀
むことを覚えしました。また病つきで課業はそつちのけの大怠惰^{おほなまけ}、
後で余所^{よそ}の塾へ入りましたが、又此^{この}先生と来た日にや決して、然^さ

う云ふものを読ませない。処が、例の難波戦記を貸して呉れた友人ね、其お友^{ともだち}人に智慧を付けられて貸本屋へ借りに行くことを覚えたのです。併し塾に居るんですから、ナカ／＼きびしくつて外出をさせません。それを密^{ひそか}に脱出しては借りに行くので、はじめは一冊づゝ借りて来たのが、今度読馴れて来ると読方が早くなつて、一冊や二冊持つて帰つた所が直に読んで仕舞ふから、一度に五冊、六冊、一晚にやつつける。其時ザラにア、云ふ新版物から、昔の本を活版に直したものを無暗に読んだ。どんな物を読んだか能く^よ覚えて居ませんが、其中に遺恨骨髓に徹して居る本が一冊あります。矢張難波戦記流の作なんですが、借りて来て隠して置いたのを見付かつたんで、御取上げとなつて仕舞つた。処で其

時分は見料が廉やすいものだけでも、此本に限つて三十銭となつた。

南無三宝三十銭、支出する小遣がないから払ふ訳に往ゆかない。

処で、どう間違つたか小学校の先生が褒美にくれました記事論説
 文例、と云ふのを二冊売つたんです、是が悪事の初めさ。それから
 四書を売る。五経を殺すね。月謝が滞る、叔母に泣きつくると云
 ふ不始末。のみならず、一度ことが露頭ろつとに及んでからは、益々塾
 の監督が嚴重になつて読むことが出来なくなつた。さうなると当
 人既に身あがりするほどの縁ゆかりなんだから、居ても起たつても逢ひた
 くツて、堪たまりますまい。毎日夕刻ラムネ洋燈を点ける時分、油壺の油を、
 池の所へあけるんです。あけて油を買ひに、と称おもして戸外へ出
 賃本屋へ駈あし付ける。登あし音がしては不可いんから跣はだ足で出たことも

ありますよ。処がどうも毎晩油を買ひに行く訳にいかないぢやありませんか。何か工風をしなければならぬのに、口実がなくつては不可ませんから、途中から引返したこともあつたんです。それから本を借りて持つて入るときに、見付けられるとわるいから帯の下と背中へ入れるんです。是が後でナカ／＼用にたつたところがある。質屋へ物を持つて行くに此の伝で下宿屋を出るので、訳はないのです。確に綿入三枚……怪しからんこつた。もし何処へ往つたと見咎められると、こゝに不思議な話がある、極ごくないしよなんだけれども、禪ふんじしを外して袂たもとへ忍ばせて置くんで、宜ようがすか、何の為だと云ふと、其塾の傍に一筋の小川が流れて居る、其小川へ洗濯に出ましたと斯かう答へるんです。さうすると剣突を喰

つて、「どうも禪を洗ひに行きますと云ふのは、何だか申上げにく悪
いから黙つて出ました。」と言ひ抜ける積りさ。

それから読む時、一番困つたのは彼の美少年録、御存じのとほ
り千ペエジ以上といふ分厚なんです。いつたい何時もごまかしよみ誤魔化読を
する時には、小説を先づ斯う開いて、其上へ、詰り英語の塾だか
ら、ナシヨナル読本、スイントンの万国史などを載せる。片一方
へ辞書を開いて置くのです。さうして蹙音がするとピタリと辞書
を裏返しにして乗掛のつけるしかけなんでせう。処が薄い本だと宜いが、
厚いになると其呼吸が合ひますまい。其処でかたはらへ又沢山
課目書を積んで、此処へ辞書を斜めにして建掛けたものです。さ
うすると厚いのが隠れませう。最も恚うなるといふあつかひ。夜

がふけると、一層身に染みて、惚ほれこ込んだ本は抱いて寝るといふ騒ぎ、頑固な家扶かふ、嫉妬じんすけな旦那に中をせかれていらつしやる貴夫人令嬢方は、すべて此の秘伝であひゞきをなすつたらよからうと思ふ。

串戯じやうだん

はよして、私が新しい物に初めて接したやうな考へをしたのは、春廼家はるのやさんの妹と背かゞみで、其のころ書生氣質は評判でありましたけれども、それは後に読みました。最初は今申した妹と背かゞみ、それを貸して呉れた男の曰く、この本は氣を付けて考へて読まなくてはいけないよと、特にさう言はれたからビクビクもので読んで見た。第一番冒頭に書いて、確かお辻と云ふ女むすめ、「アラ水沢みさはさん嬉しいこと御一人きり。」よく覚えて居るん

です。お話は別になります。昔の人が今の小説を読んで、主人公の結局つづまる所がないと云ふ、「武士の浪人ありける。」から「八十までの長寿を保ちしとなん。」と云ふ所まで書いてないから分らないと云ふが、なるほど幼稚な目には、然う云ふ考へがするでせう。妹と背かゞみに於て、何故、お雪がどうなるだらうと、いつまでも心配でく堪らなかつたことがありますもの。

東京の新聞は余り参りませんで、京都の新聞だの、金沢の新聞に、誰が書いたんだか、お家騒動、附たり武者修業の話が出て居るんです。其中に唯二三枚あつて見たんです、四五十回は続いたらうと思ひますが、未だに一冊物になつても出ず、うろ覚えですから間違かも知れませんが、春廼家さんなんです、或ひは朝野新

聞とも思ふし、改進黨新聞かとも思ふんだが、「こゝやかしこ。」と仮名の題で、それがネ、大分文章の体裁が變つて、あたらしい書方なんです。中に一人お嬢さんが居るんだネ、其のお嬢さんに、イヤな奴が惚れて居て口説くんだネ。（何かヒソ／＼いふ、顔を赧くする、又何かいふ、黙つて横を向く、進んで何かいはうとする、女はフイと立つ。）と、先づ恚うです。おもしろいぢやありませんか。演劇しばゐなら両手をひろげて追まはす。続物の文章ならコレおむすとしなだれかゝる、と大抵相場のきまつて居た処でせう。また一人の友人があつて、貧乏長屋の二階を借りて、別に弟子を取つて英語を教へて居つた。壁隣が機業はたや家なんです、高い山から谷底見れば小万可愛や布晒さらすなんぞと、工女の古い処を唄つて

居るのを聞きながら、日あたりの可い机の傍で新版を一冊よみま
した。これが私ども先生の有名ないる懺悔でございました。あの
京人形の女生徒の、「サタン退けッ」「前列進め」などは、其の
時分、幾度繰返したか分りません。夏瘦は、辰ノ口たつぐちといふ温泉の、
叔母の家で、従姉いとこの処へわきから包ものが達とどいた。其上包になつ
て読売新聞が一枚。ちやうど女主人公の小間使が朋輩の女中の皿
を壊こはしたのを、身に引受けて庇かばふ処で、——伏拝むこそ道理なれ
——といふのを見ました。纏まとつたのは、たしかこちらへ参つてか
らです。田舎は不自由ぢやありませんか。しかしいろ懺悔だの、
露伴さんの風流仏などは、東京の評判から押して知るべしで、皆
が大騒ぎでした。

あの然やう、八犬伝は、父や母に聞いて筋丈だけは、大抵存じて居りましたし、弓張月、句伝実実記などをよんだ時、馬琴が大変ひいきだつた。処が、追々ねツつりが厭になつたんです。けれども是は批評をするのだと、馬琴うし大人に甚だ以て相済ぬ、唯ね、どうもネ。彼の人は意地の悪いネチケた爺さんのやうだからさ。作のよしあしは別として好き、きらひ、鼻屑、不鼻屑はかまはないでせう。西鶴も鼻屑でない、鼻屑なのは京伝と、三馬、種彦たねひこなぞです。何遍でも読んで飽きないと云へば、外のものも飽きないけれども、幾ら繰返してもイヤにならなくて、どんなに読んでも頭痛のする時でも、快い心持になるのは、膝栗毛です。それから種彦のものが大好だつた。種彦と云へば、アノ、「文字手摺昔人形もじてずり」

と云ふ本の中に、女が出陣する所がある。それがネ、斯^かう、込み入る敵の兵卒を投げたり倒したりあしらひながら、小手すねあてをつけて、^{よろひさつ}鎧を颯と投げかける。其の鎧の、「^{ゆら}揺ぎ糸の紅は細腰まに絡まひたる肌着の透すくかと媚なまめいたり。」綺麗ぢやありませんか。おつなものは岡三鳥の作つた、岡釣話、「あれさ恐れだよう、」と芸者の^{こわいろ}仮声を隅田川の中で沙魚はぜがいふんです。さうして釣られてね、「ハゼ合点のゆかぬ、」サ飛んだのんきでいゝでせう。

えゝ、此のごろでも草双紙は楽みにして居ります。それに京伝本なんぞも、^{おやぢ}父や母のことで懐しい記念がどうございますから、淋しい時は枕許に置きますとね。若菜姫なんざ、アノ画の通りの姿で蜘蛛くもの術をつかふのが幻に見えますよ。演劇しばゐを見て居るより

余ツ程いゝ、笑つちやいけません、どうも纏らないお話で、嘸ぞ御聴苦しうございましたらう。

(明治三十四年一月)

青空文庫情報

底本：「現代日本文學大系 5 樋口一葉・明治女流文學・泉鏡
花集」筑摩書房

1972（昭和47）年5月15日初版第1刷発行

1987（昭和62）年2月10日初版第13刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：小林徹

校正：本山智子

2001年5月1日公開

2005年11月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

いろ扱ひ

泉鏡花

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>